

さなかったわけではない。それは、偉大な芸術と同じように、人間の精神と感性に、ひいては人間の社会に大きな影響を与える思想に決定的な力を与えることに貢献している。一橋大学の先輩諸氏はその価値をよく知っていたらしい。その証拠はこの資料センターのなかにある。もしそのことをハリー・ライムに教えたら、彼は一体どんな反応を示すであろうか。鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、ただ立ち竦むだけであろうか。 (一橋大学法学部教授)

ピョートル・ストルーヴェのゲルツェン論をめぐって Struve on Herzen

根 村 亮
NEMURA Ryô

1912年はアレクサンドル・ゲルツェンの生誕百年にあたり、当時の新聞や雑誌は、ゲルツェンを記念した記事や論文を一斉に掲載した。これらの論文は、ゲルツェンの思想をどのように理解し、彼の思想的遺産をどう継承するかを示すことによって、執筆者自身の政治的な立場を明確にするという政治的な性格を強く持っていた。有名なレーニンの「ゲルツェン追憶」という短いエッセイなどは、その典型であろう。

もっともレーニン以外の当時の思想家が、ゲルツェンをどのように理解していたかについては、わが国ではあまり知られていなかった。だが松原広志氏のすぐれた著作の中で、オフシャニコ・クリコフスキー、セルゲイ・ブルガーコフ、イヴァーノフ＝ラズムニック、プレハーノフらのゲルツェン論が紹介された¹。本稿では、政治的には自由主義右派の立場にあり、観念論や宗教に大きな意義を認め、唯物論や実証主義と対決する姿勢をみせていた道標派という思想家集団の一員であったピョートル・ストルーヴェ (1870-1941) のゲルツェン論を簡単に紹介する。

道標派という名称の由来となったのは、1909年に刊行された論文集『道標』であるが、そこでストルーヴェ達は、ロシア・インテリゲンツィヤの急進主義的な思想を激しく攻撃すると同時に、19世紀に始まるその伝統にも、全面的に否定的な態度をとっていた。しかし注目すべきは、彼が『道標』に執筆した論文では、ゲルツェンはこうしたインテリゲンツィヤの伝統に属さない思想家として把握されているのである。これは非常に不自然なことに感じられる。なぜならばゲルツェンは無神論者であり、インテリゲンツィヤの伝統を作り上げていった根本的な思想潮流であるナロードニチェストヴォ (ナロードニキ主義) のいわば開祖たる人物であった。しかもストルーヴェは、作家ツルゲーネフがゲルツェンのユートピア主義的な思想を批判した文章を、非常に高く評価していたのである²。

そこで彼のゲルツェン論を考察してみよう。それは1908年に行なわれた講演を活字にしたものである。ここで彼は「ロシア文化はゲルツェンよりも高い、あるいは彼と匹敵するような人物を知らない³」と評価し、そしてゲルツェンを形容するための唯一の表現として「自由」という言葉を挙げている。この「自由」という術語を説明するために、彼はそれに「教条主義」という術語を対置させる。後者はある完結した究極的なものを探求し、そしてこの探求という

作業を放棄させてくれるであろう解決を求めることであった。そしてゲルツェンは後者の立場と全く対立する思想家であったというのである。

ゲルツェンは、人間精神の永久的な自然な力としての自由の権化であった。彼は常に戦い、常に疑い、常に探求した⁴。

最終的にはここから彼は、社会主義批判者としてのゲルツェンを導きだしている。つまり探求を放棄し教条主義に陥り、社会主義的な教義を偶像崇拜することに反対する立場にゲルツェンが到達したというのである。それを示している典型的な作品として、彼は『古い友人への手紙』を挙げ、ゲルツェンの代表作であるとともに、社会主義への最良の批判であるという結論を導いている⁵。社会主義批判をこのようにゲルツェンから読み込んでいくという点で、当時の彼の政治的イデオロギーが明確にあらわれていることは確かであるが、にもかかわらず、このゲルツェン論には興味深い問題点が存在するように思われる。つまり自由といういわば内容ではなく形式と規定する概念を絶対化することは、なんらかの具体的な内容を絶対化することが困難となり、相対主義的な立場に安住するか、懐疑論的な立場に苦しむのかのどちらかになりがちである。（その場合この自由という形式を否定する立場には、断固として否定することができたが。）そして後者の場合、現実から逃避してゆく傾向を生み易い。しかしストルーヴェによれば、ゲルツェンは弱々しい諦念を抱くことなく、常に探求活動を続けていたというのである。（この点で、彼はゲルツェンがニーチェの思想を先取りしていたと述べている。）

ゲルツェン研究者マーティン・マリヤはゲルツェンのレトリックが持っている曖昧性が、最大限のプログラムと最小限のプログラムという二重の性格をその内側に隠し持っている指摘し⁶、またアイザイア・バーリンは、ゲルツェンには、人間が複雑で脆く、それをなんらかの抽象的な枠組みにはめ込むことを不可能にしている複雑性自体に価値があるという確信だけが存在し、この価値を許す自由という概念に彼の思想の本質があったと述べている⁷。ストルーヴェのゲルツェン論は、こうした西欧におけるやや保守主義的なゲルツェン理解の先駆けとなるものであろう。即ち先に述べた探求活動とは、常に理想を追いつつも、現実における様々な調整不可能な条件の中で、均衡を深めようとする活動であった。均衡を求めるためには、時代状況が異なれば、具体的な政治的主張も変わることになる。それ故にゲルツェンの政治的な綱領というのは、外面的には一貫していないように思える。この点では、反動期に社会主義者として登場し、改革の徴候が見えて来ると自由主義者となったストルーヴェには、ゲルツェンに大きく共鳴できる部分があったのかもしれない。そしてこのような調整作業においては、諸々の主義主張を一刀両断にするような確固たる立場は存在せず、むしろそれらの主義主張を形成し得る人間の多様性、異質混在性自体を評価するという考え方が存在している。そしてそこには、常に懐疑と表裏一体となった「探求」が存在した訳である。ゲルツェンの根底にあった懐疑こそストルーヴェには重要だったのである。（レーニンが、自己のゲルツェン論において、ゲルツェンの懐疑主義的傾向は否定的に扱い、自由主義者がゲルツェンの懐疑的な点に注目することをいかさまとして弾劾し、最終的には彼は社会主義に向かっていたと結論付けていることを思い起こすと、両者のゲルツェン理解の根本的相違が明確になるだろう。）

但し、ストルーヴェには、ゲルツェンをこのように高く評価する別の理由があったように思われる。彼にとってゲルツェンは偉大な「先輩」であった。ゲルツェンが、有名な回想録『過

去と思索』をはじめとするすぐれた作品を残した作家であることは事実であるが、忘れてならない彼の功績として、国外における出版活動が挙げられる。彼は1853年に「自由ロシア印刷所」を創立し、文集『北極星』や隔週刊誌『鐘』などを刊行し、これらの出版物はロシア国内に秘かに持ち込まれ、知識人から政府要人に至るまでの必読書となった。（なお本学古典資料センター「ベルンシュタイン・スヴァーリン文庫」には、『鐘』や自由ロシア印刷所の出版物が所蔵されている。）この伝統は、ゲルツェン死後も継承され、反専制的な出版物が続々と国外で刊行され、ある意味ではロシア文化史は、海外における出版物無しには語るができないほどである。そしてこの伝統は、ソ連体制が成立してからも続いた。余談になるが、ペレストロイカ後になって、出版が完全に自由化された現在、これまでに活動を続けてきた国外出版がどうなっていくのか注目されるところである。

帝政期に国外出版を行っていたのは、社会主義者や革命家だけではなかった。自由主義者達も国外出版という手段を利用していた。その中でも最大規模の出版物は、今世紀初頭にシュトゥットガルト（後にパリ）で刊行されていた隔週新聞『解放』であった。（『解放』および別冊『解放』は本学古典資料センター、「スヴァーリン＝ベルンシュタイン文庫」に所蔵されている。）前世紀末から政治的に目覚め、反専制運動を推進しようとしたロシアの自由主義者達は、組織化を進めるために国外に機関紙を設立し、自由主義運動を広範に展開させようと考えた。そしてこの新聞の編集を担当することになったのが、ストルーヴェであった。最初は、歴史家で後に立憲民主党の党首となったミリュコフが編集者の候補に挙がっていたが、行政追放から帰国したばかりの彼が辞退したため、社会民主主義系の雑誌をいくつか編集し、成功を収めたという実績のあったストルーヴェを編集者とすることに落ちついた。

祖国を離れたストルーヴェは、1902年から妻ニーナや友人フランクらの助けを借りながら、『解放』を発行し始めた。翌年スイスで自由主義組織「解放同盟」が創立され、『解放』紙はその機関紙として非常に重要な役割を果たすことになった。執筆者は多彩であった。ミリュコフをはじめとして、ゼムストヴォ系のリベラリストからはペトルンケーヴィッチ、シャホフスコイ、ドルゴルーコフ兄弟、旧ナロードニキ系からは、コロレンコ、ペシェホーノフ、旧経済主義者からはプロコポヴィッチ、クスコーヴァ、そして道標派からは、ブルガーコフ、ベルジャーエフ、フランク、キスチャコフスキーらが執筆している⁸。

創刊号においてストルーヴェは、ロシアの文化的そして政治的解放は、専ら唯一の階級、唯一の党、唯一の教義の課題とはなり得ないとし、国民的な広範な課題と捉え、こうした解放という課題のためには、深くそして広範な国民的な伝統が必要であると主張している。そしてこの伝統はロシアに脈々と生きているとし、この伝統を引き継ぐことを宣言していた⁹。もっともここでは、ゲルツェンの名前はとくに挙げられていない。

しかし国外での多忙な編集活動を続けていくにつれ、彼のゲルツェンへの共感は大きくなっていったようである。『解放』編集部は二冊の論集を刊行しているが、第一論集では、ゲルツェンの未完の断片を印刷し、ストルーヴェ自身が解説を執筆している。そこで彼は、ゲルツェンが遥か遠い未来を見据えて活動してきたことを強調し、当時の絶望的な時代状況にあっても決して破壊や不寛容を宣伝するような狂信者とならなかったことを指摘し、この精神を受け継ぐべきであると説いている¹⁰。そして第二論文集では、ゲルツェンの仕事を継承することは、彼が抱いてきた、個人と社会がいかなる教条からも解放されるための闘争の精神を、さらに育てることであることを述べている¹¹。

1905年の革命によって、彼は二度と戻れないかもしれないと覚悟していた祖国に帰ることができた。『解放』紙の役割を終わり、廃刊となった。残務整理を終え、かなり遅れてロシアに戻ったストルーヴェは、新たに雑誌を創刊する。その創刊号では、ゲルツェンの伝統を継承し、個人と国民の権利を旗印とすることを宣言し、その意味で雑誌の名前は『北極星』と名付けられた¹²。

編集者としてストルーヴェは、様々な意見が闘争する、より正しく言うならば交流する場を提供することを心がけていた。雑誌なり新聞がなんらかの教条にしたがって運営されることを嫌っていた。それ故彼には賛同できない記事もしばしば掲載していた。ある意味では彼が理想とする自由という概念を実現した小さな空間を生み出そうとしていたのである。そしてこの自由な場が、ゲルツェン以来のロシアの文化的伝統を継承し、育んでいく役割を果たすことを期待したのだった。もちろん、ストルーヴェは自由主義者でありつつも、独自のナショナリズムを訴えた点で、ゲルツェンは全く異なった思想家である。しかしゲルツェンの思想のある部分を的確に理解し、そこに共感を持っていたといえるであろう。

- 1 松原広志、『ロシア・インテリゲンツィア史：イヴァーノフ・ラズムニックと「カラマーゾフの謎」』、ミネルヴァ書房、1989年、p.201-209
- 2 П.Струве, *Patriotica, политика, культура, религия, социализм: Сборник статей за пять лет (1905-1910 гг.)*, СПб., 1911, с.587.
- 3 Там же, с.526.
- 4 Там же, с.527.
- 5 Там же, с.530.
- 6 Martin Marlia, *Alexsander Herzen and the Birth of Russian Socialism 1812-1855*, Cambridge, Mass., 1961. pp.413-414.
- 7 I・バーリン, 「アレクサンドル・ゲルツェン」, 『ロマン主義と政治』, 岩波書店, 1984, pp.362-370.
- 8 もちろんロシア国内在住者は、ペンネームで執筆している。このペンネームの解説については、К. Шаццлло, Новые сведения о журнале “Освобождение”, Археогр. ежегодник за 1977 год., М.1977, стр.112-113. を参照。
- 9 П.Струве, От редактора, Освобождение, No.1, 18-го июня, 1902, с.2.
- 10 П.Струве, Предисловие к “Отрывкам из “Былого и дум” А. Герцена, Освобождение, книга первая, Stuttgart, 1903. p.1.
- 11 R.Pipes, *Struve: Liberal on the Left 1870-1905*, Cambridge, Mass., 1970, p.310. 残念ながらこの第二論文集は、古典資料センターには所蔵されておらず、筆者も未見である。
- 12 П.Струве, От редактора, Полярная звезда, No.1, 1905, стр.3-4

(一橋大学社会学部助手)